

(トップページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(MENA・イスラム圏: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/MenaOicCountries.html>)

(エッセイ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/Essay.html>)

マイライブラリー:0212

(注)本稿は1月24日と27日の2回にわたりブログ「アラビア半島定点観測」に掲載したレポートをまとめたものです。

2012.1.27
前田 高行

(随想)共和制が倒れ君主制は残った:「アラブの春」の一年

目次	頁
1. 倒れた共和制国家群	1
2. 残った君主制国家群	2
3. 共和制と君主制はどこが違う?	2
4. 支配の正統性	3
5. 支配者と言う甘いポスト	3
6. 安定を求める小市民達	4

1. 倒れた共和制国家群

チュニジアの政変に始まった「アラブの春」から1年が過ぎた。昨年1月15日、23年もの間強権をふるったチュニジアのベン・アリ大統領がサウジアラビアに亡命、そしてエジプトを29年間独裁的に支配してきたムバラク大統領は現在裁きの場に晒されている。両国に挟まれたリビアでは両大統領をはるかに上回る41年間という超長期にわたり同国を支配したカダフィ大佐が内戦の末に殺された。彼ら独裁者達は亡命、裁判、殺害と分かれているが、いずれもその末路は哀れと言うほかはない。「奢れる者は久しからず。ただ春の夜の夢の如し」。平家物語の無常感と「アラブの春」がダブって見える。アラブ民族に無常感があるのかどうか知らない。しかし彼らは独裁者の悲惨な運命も「アラアの思し召し」と考えていることは間違いないであろう。

「アラブの春」は未だ終わっていない。イエメンでは33年間権力を握っていたサーレハ大統領がサウジアラビアなど GCC 諸国に見放され、洪々その座を降りた。シリアでも父子二代にわたるアサド政権が危機に瀕している。これら全ての国々に共通しているのは「共和制」と言う政体である。曰く「チュニジア共和国」、「エジプト・アラブ共和国」、「イエメン共和国」、「シリア・アラブ共和国」等々。正式国名を「大リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリーヤ国」と称するリビアも政体は共和制である。

2. 残った君主制国家群

勿論民主化の嵐はバハレーン、モロッコ、ヨルダン、オマーンなどの君主制国家にも吹き荒れた。曰く「バハレーン王国」、「モロッコ王国」、「ヨルダン・ハシミテ王国」、「オマーン・スルタン国」。しかもこれらの国では国王が首相を指名し、議会も勅撰議員が多数を占めるなど民主主義には程遠く、専制君主制と呼んでもおかしくない。アラブの他にも世界には「連合王国」(United Kingdom、UK 即ちイギリス)のように「王国」を呼称する国はいくつかあるが、いずれも民主主義国家であり、専制君主制国家は今やアラブの専売特許である。しかしこれらアラブ王制国家は(今のところ)何とか王制を持ちこたえている。アラブでは「共和制」が倒れ、「君主制」が残った。

革命で君主制から共和制に移行するのが歴史の必然と教えられた日本人にとって、このように共和制が倒れ君主制が残った「アラブの春」は理解に苦しむ。まして「アラブの春」の後に政権を握るのが、イスラム主義の宗教政党だとわかると一層戸惑ってしまう。欧米的民主主義を教え込まれた日本人はイスラム主義政体を民主主義とは別物と考えることしかできないからである。

3. 共和制と君主制はどこが違う？

広辞苑によれば「共和制」とは「主権が国民にあり、国民の選んだ代表者たちが合議で政治を行う体制」とされている。また「専制君主政治」は「支配者層と被支配者層とが身分的に区別されていた前近代社会において身分的支配層が行った統治」とであると説明している。両者の間に大きな差異があることは言うまでもない。

しかしアラブ諸国の「共和制」と「君主制」は統治の実態において実は殆ど差異がないのである。崩壊前のチュニジア、エジプト、リビアなどは共和制と言う名前とは裏腹に強権的な独裁者による専制政治だった。彼らは一旦権力を握ると親族或いは忠実な部下を支配機構の隅々に登用、秘密警察と軍隊で反対派を弾圧した。そして権力機構を独裁者に有利な翼賛組織に仕立て上げると、次には大統領の多選を禁じた「憲法」を改悪して長期独裁体制を正当化したのである。

ただ彼ら独裁者たちが狡猾だったのは国際政治に極めて敏感であり、米ソ冷戦時代には両者を手玉にとり、次にソ連崩壊後の米国一強時代になると、「共和制」の名のもとに表面的な民主主義で欧米の目を欺いた。即ち「コスメティック・デモクラシー(化粧顔の民主主義)」である。ひねった見方をすれば欧米特に米国はアル・カイダ、ハマス、ヒズボラー、イランなどイスラム急進勢力を抑え込むため、これら独裁国家の「コスメティック・デモクラシー」に進んで手を貸し、或いは敢えて見て見ぬふりをしたのである。

これに対してサウジアラビアをはじめとする「君主制」国家群は今も支配一族が行政、立法、軍事等全ての権力を独占している。とりわけ GCC のような産油国では石油の富をばらまくことで一般国民に西欧流近代生活の満足を与え、或いは鼻先に議会選挙、女性の地位向上など西欧の匂いをふりまくことで一般国民の目を欺いていると言える。

4. 支配の正統性

何故アラブ各国の国民は「共和制」を倒しながら「君主制」を倒さなかった(あるいは倒せなかった)のであろうか？政治・経済・社会等各国固有の理由があり単純には説明できないであろうが、支配体制が成立した過去の経緯と一般国民が期待する未来と言う二つの視点による仮説を提唱してみたい。過去の視点とは「体制の正統性(legitimacy)に対する被支配者の認識」であり、未来の視点とは「被支配者の安定(stability)願望」である。

共和制の「支配の正統性」は国民の合意に基づく基本法典(憲法)により国民が権力の交代を選択できることである。大統領制のもとでは4年程度の一定期間ごとに公正な選挙と個人の自由意思で大統領を選ぶシステムが保証されることで国民自身が共和制を容認する。もし大統領就任後に不正、失政があれば任期満了後の選挙で別の人物を新大統領に選ぶ。極端な話、被選挙権のある国民は誰でも大統領になれる可能性がある。ここでは支配の正統性(legitimacy)は個人ではなく「共和制」と言う制度にあると言える。

一方、「君主制」は歴史上のある時点で個人又はその一族がある範囲の土地とそこに住む人々を武力で支配することから始まる。支配の正統性(legitimacy)は武力によって担保されるのである。当初は支配に対する住民の抵抗があるが、それを乗り切って支配体制が二代、三代と続けば、住民は好むか好まないかはさておき支配体制を受け入れるようになる。こうして legitimacy は支配者一族に受け継がれる。

5. 支配者と言う甘いポスト

この二つの体制を一般市民(被支配者)の側から見た場合、両者の違いは共和制では誰もが大統領になれるチャンスがあるのに対し、君主制では支配者一族の遺伝子を持たない者は君主になるチャンスがない、ということである。戯画的に表現すれば共和制では、自分或いは「彼」が大統領になる可能性があるが、君主制では自分も「彼」も国王になることはあり得ない。つまりいずれの制度でも自分と「彼」は平等なのである。

ところがアラブの共和制国家で「彼」が大統領になりその地位の快適さと甘さを知った「彼」はその地位にしがみつこうとする。「彼」の妻や子供、親族、取り巻きにとってその誘惑は更に大きい。大統領の「彼」自身は困難な国政や政敵との権力闘争に身をすり減らす、「彼」の傘の下で権力の果実を甘受するだけの妻、子供、取り巻きたちは現状維持を願う。そのため彼らは「彼」をたきつけていつまでもその地位を保持させようとする。特に子供は多くの場合、生まれた時から権力の甘さしか知らない。「彼」と彼の関係者の間では「彼」が死ぬまで権力者の地位を保ち、さらには地位を世襲化することが自己目的化する。チュニジア・ベンアリ大統領の妻、エジプト・ムバラク大統領やリビア・カダフィ大佐の息子たちなどその例は枚挙にいとまがない。

しかし大統領一族以外の一般国民にとってそれは耐え難いことである。かつて自分と大差のなかった「彼」が独裁者となり、或いは自分よりも身分の低い「彼女」が独裁者の妻として勝手気ままにふるまう姿は耐えられない。有体に言えば「彼」或いは「彼女」たちに対する「ねたみ」「そねみ」の感

情である。それが積もり積もって爆発したのが今回のアラブ共和制国家の政変の根幹にある素朴な国民感情であろう。

6. 安定を求める小市民達

一方、君主制国家ではこれを打倒するためには武力が必要であるが、武力は君主一族に独占されている。君主は被支配者の反発を抑えるため開発独裁体制によって社会の安定と経済発展を図り、時にはバラマキ行政によって国民を懐柔する。これらの政策は民心安定にかなり有効である。一般市民は仕事と収入があり、社会がそれなりに安定していれば過激な社会変革は求めないものである。「君主制は過去の遺物」である、と言うのは西欧流の観念論であることを忘れてはならない。

「アラブの春」の標的は「共和制の独裁者」であった。こうしてアラブでは「共和制」が倒れ、「君主制」が残った(残っている、というべきかもしれない)。各国では「共和制と言う名の独裁国家」に代わり「イスラム主義に基づく共和制国家」が生まれたと言える。ただ西欧諸国或いはその思想に慣らされた日本人にとってイスラムと共和制を結び付けることが難しいのは事実である。

もう一つ歴史的な観点から付け加えるとすれば、実はリビアのカダフィ体制は革命を経て王制から共和制に変化した最初の体制であり、チュニジア、エジプトなどもほぼ同様の歴史過程にある。つまり王制打倒によって生まれた最初の共和制が独裁者と恐怖政治をもたらしているのである。このような歴史的事実はフランス革命直後のロベスピエール(ジャコバン党)による恐怖政治、或いはソビエト革命後のスターリンの「血の粛清」にも見ることができる。君主制崩壊後の共和制には必ず恐怖と流血がつきものである。それ故にこそ現在の湾岸君主制国家の平凡な市民達は、混乱と不安を予期させる革命より現在の君主制のもとでの安定(たとえ小市民的安定と言われようとも)のほうが大切なのではないだろうか。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp